

アフリカで

榎田 英郎

私は今、アフリカ大陸の真ん中にあるカメルーンという国で、眼科医として医療奉仕をしています。

一九九四年の一月、勤務していた病院を定年退職するにあたり、自分の第二の人生を、私を一番必要としてくれる人々と共に働きたいと考えました。そして、発展途上国の人々が、先進国と同様な眼科の医療を受けられるように、現地の医師を教育するという奉仕の道を選び、カトリックの信徒宣教師とし

ての研修を一年間受けました。その研修期間中、私のことを知ったイタリアのカトリックのボランテイアグループ、C O E (Centro Orientamento Educativo) からカメルーンに来てくれないかとの打診があったので、その年の秋、現場を見に行きました。

首都のヤウンデには、この国唯一の医科大学があり、一学年七十人位の学生がいるようですが、眼科

の機械も充分にはなく、専門教育はほとんどできていないようでした。人口一、三五〇万に医師が二千人位、そのうちの眼科医は外国人も含めて十二、三人というのが当時の状況でした。大きな町には公立病院があつて、広い敷地に各科の建物が建つてはい

ますが、設備は、私が眼科医になつた三十数年前に日本で使われていたものが並んでいて、病院によっては医師が不在で、看護婦が相談に乗っているところもありました。ほとんどの病院は、眼科の診察室はあつても、診療はしていないようでした。COEは、首都の約七十キロ南にあるバルマヨという町で、学校経営の傍ら、小さな診療所を持っていて、そこではカメルーン人の医師が一人と何人かの看護婦が働いていました。その診療所に新しく眼科を開いて、カメルーンの前を指導してほしい、日常の必要経費、住む部屋、食事、および年一回日本に帰る交通費とわずかな小遣いはCOEが負担するが、診療に必要な機械類は日本から持つてきてほしい、

というのがCOEの希望でした。着任はなるべく早く、ということでした。

一概に眼科の診療機械といつても、新しく買うにはかなりの資金が必要です。しかし私には、求められているところでその必要に應えたいという気持ちはあるものの、資金的なあては全くありません。どうしたらよいかわからないままに、時間はどんどん過ぎていきました。ところが、そんな途方に暮れた私の事情を知つた開業している先輩後輩から、使わなくなつた機械があるからと寄付の申し出がありました。また、癌の告知を受け、開業していた医院を閉院することにした先輩が、亡くなる前にその医院の機械と器具全てをカメルーンのためにゆずつてくださいました。さらに、眼科の機械を扱っている会社からも、白内障の手術器具、眼内レンズ、ゴム手袋等、たくさん物の寄付があり、このような善意によつて、何かと基本的な診療に必要な機械が揃うまでになつたのです。さらにこれらの機械類を現地

まで輸送するための経費も必要ですが、所属する教会で「カメルーン医療援助基金」という窓口を作ってください、ここにも多くの方から援助をいただいたおかげで、最初のコンテナを運ぶ費用ができました。これらのことがなければ、私の奉仕はとても実現不可能なことでした。今、「支える」という特集テーマのこの原稿を書きながら、まず思い出すことは、家族をはじめ、多くの人々に「支えられ」て、この奉仕が成り立っているということです。

こうして私は、一九九五年春、カメルーンに着任しました。

カメルーンに着いて最初の仕事は、カメルーンの医師免許と滞在許可を取ることでした。この国は、大部分がフランスの植民地だったところですが、西の一部にイギリスの植民地だった部分があるために、英語とフランス語が公用語になっていて、履歴書等の書類は英語でもフランス語でもよいので幸い



しました。何しろ、私のフランス語は、カメルーンに来ることが決まってから、まさに六十の手習いではじめたものですから、到底実際の役に立つようなものではないのです。医師免許は、日本の医師免許証に、日本大使館で作ってもらった証明書を付けて手続きをしました。医師免許の方は三ヶ月くらいおりましたが、滞在許可は、翌年の五月になってやっと五年間の許可がおりました。この手続きにも色々な人の助けが必要でした。

船便でコンテナがつくのを待って、機械を組み立

て、診療ができる状態になるのにも数ヶ月かかりました。機械を組み立てている最中にも患者さんが来て、やっと組み立てた機械を使って、梱包を解いた箱の散らかっている中で、最初の診療をしました。

診療を始めてまず困ったのは、やはり言葉の問題です。私のいるバルマヨはフランス語圏で、英語の通じる人がほとんどいません。イタリア人と一緒に作った予診票を渡して患者さんに書き込んでもらうので、来院の目的はわかるのですが、視力検査の段階で、輪のどこが切れているかを答えるように説明するのに一苦労です。イタリア人が書いてくれたフランス語を読みながら説明しますが、なかなか通じません。代わりにカメラマン人の看護婦に説明してもらおうとしても、看護婦自身が眼科の経験がないのでうまくいきません。仕方なく視力検査室に長椅子を持ち込んで待合室にし、待っている間に他の人の視力検査の様子を見せることにしました。これは効果があったようで、何とか視力検査はできるよ

うになりました。以前から診療所にいた医師とは英語が通じるのですが、彼は一般外来が終わらないと眼科には来ません。英語のわかる看護士を一人雇ってくれたのですが、彼は眼科に興味がないらしく、他の用事を見つけてはどこかに行ってしまうので、結局私一人で診察をすることになります。この国では、患者さんが手帳を持っていて、医師が診療内容、診断、治療を書き、それを持って患者さんが薬局に行つて薬を買う制度になっているので、手帳を患者さんに返すときに書いたものを見せながら説明すると、何人かは、私のフランス語でもわかるようです。しかし大部分の人は、手帳を持って看護婦のところに行つて説明を受けているようでした。医師のいるときには彼が説明してくれます。この国には二百位の部族があつて、それぞれに固有の言葉を持っているので、年寄りでフランス語の話せない患者さんは、カメラマン人の医師とも話が通じないようです。そんな状態での診療がしばらく続いています。

した。その後、一般外来のためにルワンダ人の医師を一人雇い入れたので、最初からいた医師が眼科を専門に勉強できるようになったのですが、彼は、やりたいことがあればそれを優先して、眼科は気が向けば習いに来るという状態で一年が過ぎました。

二年目からは、看護婦が一人、眼科の専属に入りました。この国では医師数が少ないために、看護婦も医師と同じように、患者さんの話を聞いて診断し薬を処方する仕事をします。彼女も将来は眼科の仕事をしたいという希望だったので、この国の事情も考えて、看護婦にも眼科診療を教えました。この看護婦はとても熱心で、わからないとすぐ聞きに来るし、お産で休んだ以外は欠勤もなく、一年の間に、眼科の診断に関しては初めからいる医師よりもはるかに正確になりました。医師の方は診察はあまり好きでないようでしたが、手術には興味があり、初年度から少しずつ執刀させたので、二年目の終わりに白内障の手術はかなりうまくなり、眼内レンズの

挿入も無難にできるまでに成長しました。二年目の途中からは医師が一人増えて、彼も仕事の合間には眼科の勉強に来るようになりました。カメルーン医師二人の診療体制になってから、看護婦は診察をやめ、検査を主にするようになりました。一九九八年の四月（三年目）からは、眼科のために一人看護婦が増えて、カメルーン人の医師二人、看護婦二人の診療体制が出来上がり、私はもっぱら指導の仕事に専念できるようになりました。一方、患者さんの数も増えて、首都はもちろん全国から来るようになりました。しかし遠くから来ることができる患者さんは、カメルーン人の中でも金持ちです。

バルマヨでカメルーン人による診療体制がかなりできて、私が常時いなくても大丈夫になってきたので、四百キロほど西のチャンという町のカトリック病院からの要請に応えて、そちらの指導も始めることにしました。その病院の看護士を三ヶ月間バルマヨに呼んで眼科の基本的な指導を行い、その後、月

に一週間程度診察に行くことにしました。こちらから出かけていかないと、本当に貧しい患者さんが受診できないからです。今は、チャンへの出張診療と指導も軌道に乗りつつあります。

一方、大きな難問もあります。日本での専門教育は、初めの一年はこれを教えて二年目はこれ、というように年次を追った教育体制ができていて、教える方も教わる方も、それを当然のこととして受け入れています。しかし、専門教育の制度ができていない国では、こちらの教えたいことと、相手の習いたいこととは必ずしも一致しないのです。診断が充分にできない医師が手術をするのは非常に危険なこと

ですが、現地の医師が求めるのは、時間のかかる病気の診断の知識よりも、手術の技術の習得です。私が診療に立ち会っているときは、診断の段階で、手術の適応があるものか、やっても患者さんに負担がかかるだけで効果は少ないから患者さんとよく相談

して決めるべきものか、手術の適応はないものか、等のチェックができますが、私が休暇で日本に帰っている間に、現地の医師にはまだ無理な手術が行われていたり、時には、それが誤った診断の結果行われた手術であつたりすることもあります。そのようなことの無いように注意はしても、それに従うかどうかは相手の気持ち次第です。

「支えること」、それは相手の自立を援助することなのだと思いますが、そこには切り離すことのできない、基盤としての教育の問題が大きくかかわっていることを痛感しています。途上国の援助の難しさを感じさせられている今日この頃です。

(眼科医・在カメルーン)